

【シンポジウム】 オスカー・ワイルドとコナン・ドイル

1880年代末にコナン・ドイル（1859-1930）が小説家としてささやかなデビューをとげたころ、オスカー・ワイルド（1854-1900）はすでに文壇の寵児だった。アイルランドに出自を持つドイルにとって、「同郷」であるワイルドのキャリアは輝かしいものに見えただろう。自伝『回想と冒険』（1924）には、才気あふれるワイルドと会食した機会のことが印象深く語られている。両者の交渉はそれだけにとどまらない。一例を挙げれば、ドイルのホームズものの長編『四人の署名』とワイルドの『ドリアン・グレイの肖像』は同じ1890年に同じ雑誌に立て続けに発表され、少なからぬ要素を共有しているのだ。

このシンポジウムでは、同時代を生きた二人の作家を様々な観点から比較し、ワイルド研究・19世紀末文化研究に新たな視点を提供してみたい。

オープン・シークレット

大久保 譲

『ドリアン・グレイの肖像』や「謎のないスフィンクス」のオスカー・ワイルドは、「秘密」に憑かれた作家だといえる。一方、コナン・ドイルが「秘密」を核に据えた推理小説というジャンルを書き続けたことはいうまでもない。ドイルの生み出した名探偵は表面に残された痕跡から秘密を読み取り、ワイルドの作り上げたサー・ヘンリーは「表面で判断しないのは浅薄な人だけ、本当の謎は目に見えないものではなく見えるものだ」とうそぶく。窓、鏡、皮膚といったいくつかのモチーフを手掛かりに、またワイルドともドイルとも浅からぬ関連がある R・L・スティーヴンソンの『ジークル博士とハイド氏』を補助線として用いながら、二人の作家の「秘密」へのアプローチを考察する。

オスカー・ワイルドとコナン・ドイルの実験

-身体とスピリチュアリティ

小川公代

オスカー・ワイルドは自分のセクシュアリティと社会の厳格な性規範との葛藤で苦しみながらも、作家としてその規範に妥協しない芸術の道を模索した。『ドリアン・グレイの肖像』で削除された「愛」に関する台詞、あるいは彼の裁判での演説はその一例であろう。これまでほとんど論じられなかったワイルドの宗教観や脱身体化が、実はこのような愛の定義と不可分であったというテーゼのもとに、すぐ後に文壇に登場するコナン・ドイルがよく似た問題意識を共有していた可能性を模索したい。ドイルは小説家になる以前は医師であ

ったこともあり、『シャーロック・ホームズ』シリーズでは科学的知見や蓋然性を基盤にしたナラティブを構成している。興味深いのは、このようなドイルが、ヴァージニア・ウルフの『自分ひとりの部屋』に描かれる「魂」(soul)をベースとした実験的な関係構築をフィクションで実現しようとした点である。ワイルドが関心を寄せていたスピリチュアリティの究極の実践は、ドイルにとっては交霊会への参加であったともいえる。ドイルが脱身体化をどのように捉えていたかを、彼の初期作品だけでなく、1920年代以降の心霊主義やそれが結実している『霧の国』などの分析を通して考察したい。

ジャーナリズムと文学の狭間で

緋田亮

ワイルドとドイルの出会いが、アメリカの『リピンコッツ・マンスリー・マガジン』の編集者 J・M・ストッダードとの会食であることに象徴されるように、両作家はジャーナリズムの時代を生きた人物であった。書簡や批評『社会主義下の人間の魂』などにおいて痛烈にジャーナリズムを批判しつつも、作品の出版はもちろん自己宣伝にもジャーナリズムを大いに活用したワイルド。『パンチ』の挿絵画家として活躍した伯父をもち、自身も『コーンヒル』や『テンプル・バー』など多くのジャーナリズム媒体に作品を投稿することで作家としての道をひらいたドイル。ジャーナリズムと文学の曖昧な領域——ドイルの言葉を借りるならば“twilight land”——を生きた彼らのジャーナリズムに対する態度、作中での扱い方、そしてその扱い方から見える彼らの文学観を、二人の書簡や散文・演劇作品などと同時代のジャーナリズム資料を用いて検討したい。

芸術と犯罪-ワイルドとホームズの「インテリア」

山口恵里子

1890年6月、ワイルドは自身のインテリアへの関心を存分に描出した『ドリアン・グレイの肖像』を『リピンコッツ・マンスリー・マガジン』に発表する。その4ヶ月前ドイルは同誌に『四人の署名』を掲載していた。ホームズはありふれた出来事に潜む犯罪とその芸術性に惹かれ、ワイルドは日常を彩る芸術性を追い求めた。この意味で両者とも世紀末の日常と芸術を接触させた媒体者であったが、ワイルドが称えた「美しい家」は日常に美を賦与する舞台装置だったのに対して、ホームズが調査する部屋はおぞましい犯罪現場である。そこに「インテリア」は不在であり、ただ証拠となるモノが残されるのだが、それらが逆に犯罪に芸術性を与えている。身体を位置づける空間装置系であるインテリアは、ワイルドとホームズの身体性の相違もおのずと浮き彫りにする。ワイルドは白く塗られた可動的な椅子を自宅に置いたが、ホームズはビロード張りの肘掛椅子に坐る。本報告では、

インテリアを通してワイルドとホームズにおける芸術と犯罪の意味を探り、その意味を体現する彼らの身体性にも迫りたい。